

日本で絶滅が危惧されるチョウの多くは、草原性の種で、ゴルフ場開発や宅地造成などの人間生活を優先する諸事情で、草原の自然環境が破壊されたり失われたりしたことが大きく影響している。そのようななかで、オオウラギンヒョウモンは現在環境省が指定するレッドデータの最高ランクである絶滅危惧ⅠA類選定で、山口県の秋吉台と熊本阿蘇高原、および長崎県の自衛隊演習場で見ることができなくなっている。

オオウラギンヒョウモンがいったいつ頃から希少種となったのか詳しく知らないが、少なくとも1960年半ばまでは長野県から近畿、中国地方にごく普通に産していたようで、実は筆者も気づかないまま1962年8月に信州の七島八島高原で採集している。このことに気づいたのはなんと採集年から48年経過した2010年7月のこと。2008年以降、ギフチョウの保護ボランティア団体：加古川の里山・ギフチョウ・ネットのイベントとして「青少年のための科学の祭典」にブース出展するようになって、そこで子供たちに「チョウアルバム作成」を体験してもらった新たな企画を立ち上げた。アルバム作成には蝶の三角紙標本をピンセットで4枚の翅だけとする標本材料の準備が必要で、過去の保管標本からウラギンヒョウモンを対象に次々と翅を外していったのだが、取り外したその直後に後翅裏面の外縁形態がオオウラギンヒョウモンにしか出ないM字型になっていることに気づいたという次第。採集した当時にもオオウラギンヒョウモンを捕獲したという認識はなく、当時は希少種でもなんでもなかったようで、三角紙にもオオウラギンヒョウモンとの記載がないまま複数のウラギンヒョウモンに埋もれる形で保管していたのが実情だ。本種の母チョウから1200-1860弱という採卵をして大量飼育をした故郷山邦夫氏の話が有名だが、加古川の里山・ギフチョウ・ネットのメンバーで「兵庫県の蝶」の著者でもある近藤伸一氏もかつて同レベルの飼育をされており、筆者はそのときの羽化個体を提供してもらっている。最近では、上述のチョウアルバムの材料として友人が持参した標本の中に長崎産のオオウラギンヒョウモンが混じっているのに仰天。新鮮度が低い個体だが、希少的価値を知らない子供たちに提供するのはもったいないと回収させてもらって筆者がアルバム作成をして保管している（右図）。

